

鎌倉高校 70 周年記念誌



校歌

神保光太郎 作詞

石渡日出夫 作曲

1. 朝は呼ぶ かがやけり

学び舎の窓

大いなる 夜明けをもとめ

われら行く この道よ

真理の道

興せここに われら鎌倉高校

日本の未来

2. 山は呼ぶ きよらなり

不二ヶ嶺の雪

星月夜 ひかりをたずね

われら行く この道よ

希望の道

誇れここに われら鎌倉高校

日本の未来

3. 海は呼ぶ とどろなり

わだつみの声

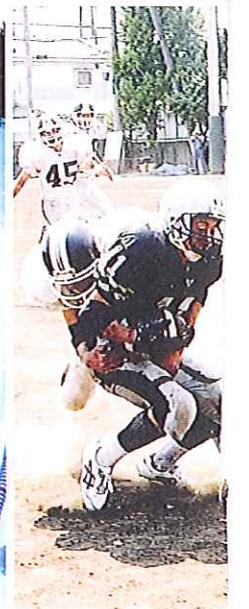
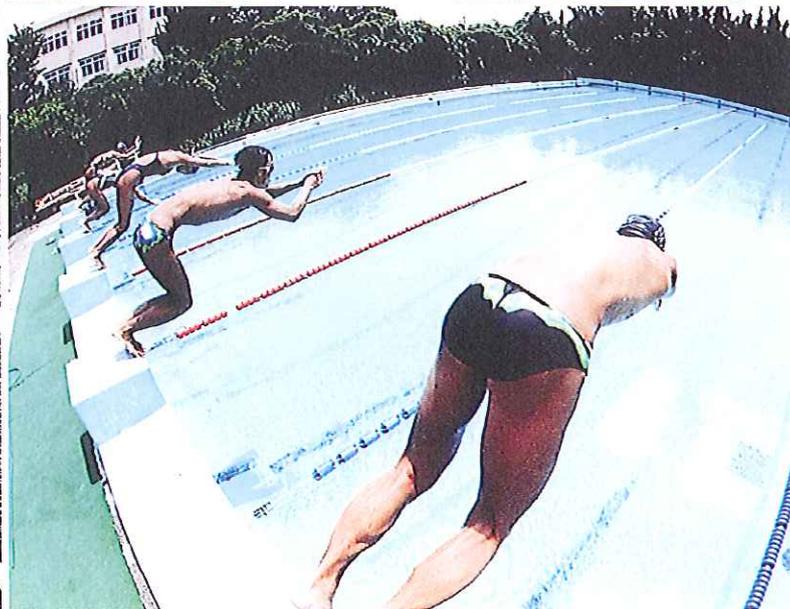
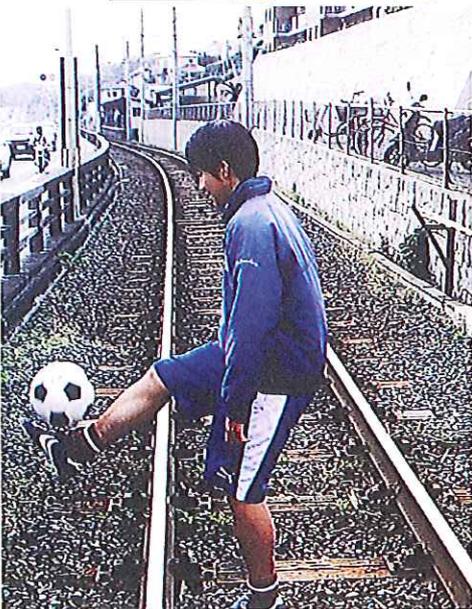
新しき ともづな解きて

われら行く この道よ

世紀の道

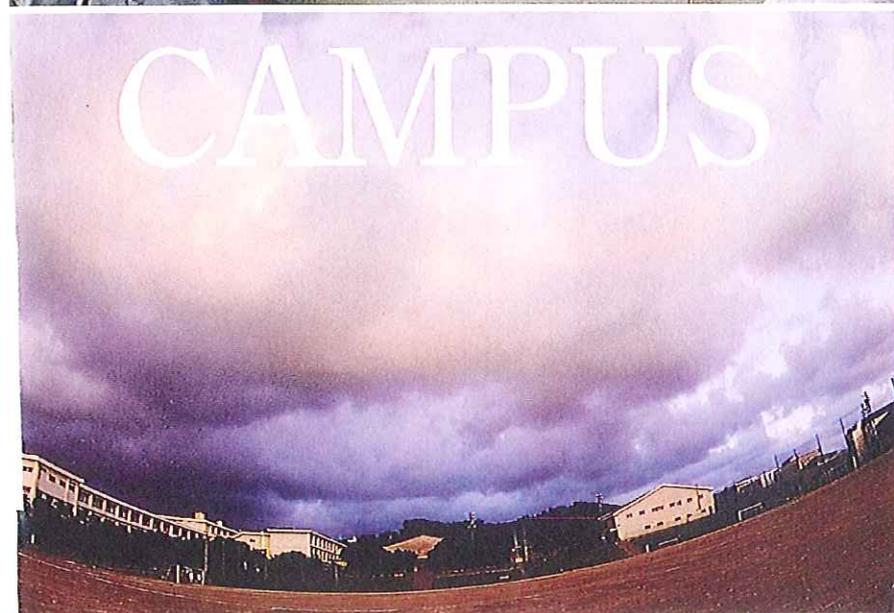
拓けここに われら鎌倉高校

日本の未来



目次

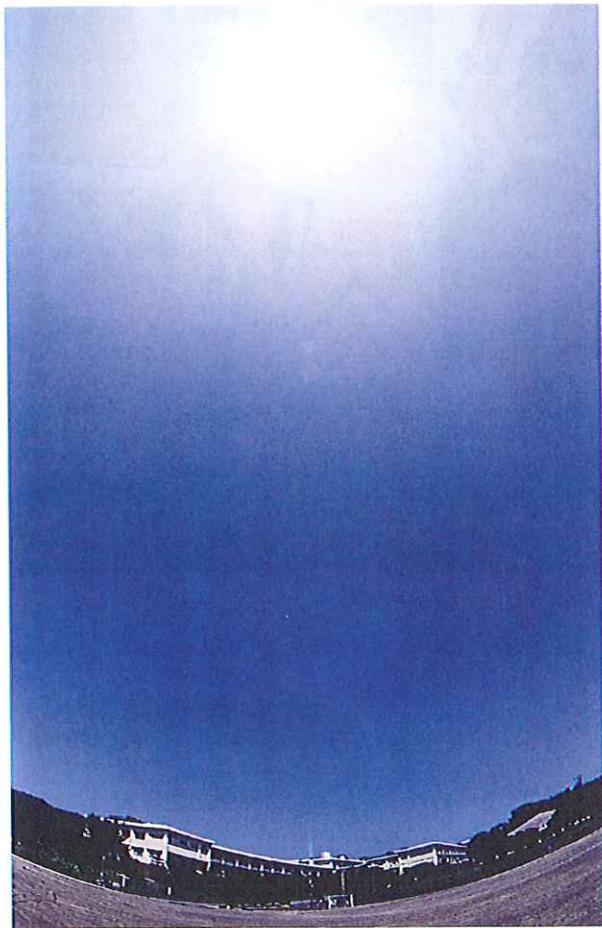
挨拶	5 ~ 6
沿革	7 ~ 20
年間行事	21 ~ 22
鎌高祭	23 ~ 24
体育祭	25 ~ 26
合唱コンクール	27 ~ 28
部活動	29 ~ 32
国際交流	33 ~ 34
鎌高生の進路	35 ~ 38
教育課程の変遷	39 ~ 40
P T A 活動	41 ~ 43
同窓会のあゆみ	44
現・旧職員一覧	45 ~ 48



鎌倉



現在の校旗は、1930（昭和5年）に作成された校旗の旧校章を取り去り、「鎌高」の文字を縫い取りましたものです。



先人に負けない気概を

学校長
梅沢 淑弼

県立鎌倉高等学校の創立70周年を迎えるに当たり、これまで本校を支えて下さいました多くの関係者各位に、心より感謝申し上げます。

本校は、昭和三年に鎌倉町立実科高等女学校として設立され、昭和二十六年に県立移管されました。それに伴い風光明媚なこの地に移転され、以来半世紀になろうとしております。

目の前に茫洋と広がる海、校舎より望む江ノ島・霊峰富士、そして伊豆大島から三浦半島へと大きな懐を思わせる景観には言葉もありません。次世代を担う若人の心身練磨の場として、この地に定められた当時の関係者の心意気が伝わって参ります。この自然の思恵と地域の温かいご支援により、活発で明るく大らかな自治・自立の精神が根付き、それが伝統として脈々と流れ、生徒達の大きな支えとなっております。

昭和二十八年十二月、生徒会機関誌『につさか』第一号に、「良い伝統、他に誇り得るものを作り上げるのは、他の誰でもない。実にこの創造期にある時代に生きる我々なのである。（中略）良き伝統を作り上げるためにも、また人間完成のためにも、我々は常に自覚ある行動、誇りをもった信念ある行動を取らねばならない。」と草創期の熱い思いが語られております。

今、社会は様々な問題が山積し、教育も戦後五十年を経て一大改革期を迎えております。私達も自覚と信念と誇りとを持って行動しなければなりません。そして、こういった時期に創立70周年の節目を迎えることは、天の配剤の妙と言わざるを得ません。困難を切り開いた先人の心意気を思い、その気概に負けない強い意志と21世紀を創造する意欲を持って、更なる前進を続けなくてはならないと考えております。

最後に、本校が地域の教育の拠点として充実発展しますよう、ご支援ご協力をお願い申し上げ、挨拶と致します。



創立 70 周年にあたって

P T A 会長
滝沢 茂男

神奈川県立鎌倉高等学校は、創立 70 周年を迎えました。この長い歴史は、P T A や同窓生、そして本校に係わった皆様の支えの賜物であり、心からお喜び申し上げます。

本校は、昭和 3 年 3 月設立の後、第二次世界大戦の復興期に、故城所校長のご提唱により、「日坂の松籟」詠われる現在地に移転され、多くの有為な人材を社会に送り出して参りました。本校を巣立っていかれた多くの卒業生の胸の中には、この地で過ごし、夢を語った熱き青春の炎がいつまでも燃えつづけていることでしょう。

70 年の歴史の重みは地域社会の誇りとなっております。困難に挑戦していく強い精神力と、共に乗り越えていく友情を育むという理念を掲げ、社会の混乱を乗り越えて参りました。少子高齢化による年金・健康保険制度などの危機、国際化からくる競争社会への転換といった必然の社会変化により 21 世紀初頭は未曾有の変革期になります。この時に当たり、生徒諸君には本校の伝統を受け継ぎ、これからの変革に負けることなく、よりよい変革を実現できる人に成長してほしいと願っております。

現在、本校は「国際理解教育」を特色としており、同時に地域に開かれた講座を持つという、まさに時代に求められている教育が実践されています。鎌倉高校の新たな発展が新たな時代を開き、個性のきらめき、そして愛情と友情にあふれた豊かな社会と平和な国づくりに貢献されることを期待しております。



鎌倉高校の将来

生徒会長
加藤 一機

県立鎌倉高等学校が創立 70 周年を迎えました。もうほとんど一人の人間の一生と同じくらいの長さを生きたことになり、もはや鎌高には人間味さえ感じられます。

私は鎌高が繰り返される出会いの中で、一人の人間と同じ命の重みを持ってきたのではないかと思います。

卒業された先輩方も、かつての鎌高を見てそう思ったことでしょうし、改めて今の鎌高を見ても、より一層その歴史の深みを感じると思います。

鎌高はまた、時代の流れとともにそのスタイルも変えてきました。国際社会という時代に合わせるようにして、国際理解ホールが建てられ、学校や家庭で留学生の受け入れも行われるようになりました。生徒もまた時代に合わせて、時代にながされるということではなく、肯定的な意味で自分達の在り方を決めています。

鎌高が、一人の人間としての意味や価値を持っているのであれば、時代とともに発展することはとても素晴らしいことだと思います。そしてこれからも、時代の流れとともに進化発展し、その姿形を変えていくことでしょう。私たちがまた、鎌高とともに成長し、新しいスタイルを築き上げていきたいと思います。

私たち鎌高生の中で、変わらないものもあります。それは、他に幾つもあるかも知れませんが、私たちが鎌高で高校生活を送っていくなかで沸々と湧き上がっているのを感じている情熱です。他校と比べてとしても、生徒が母校を思う気持ちはまた特別なものであると思います。これは、ただ単に伝統という意味だけでなく、鎌高で学んだ全ての人が共有できる喜び、そして将来鎌高生の証であり続けるでしょう。

これからも鎌高が発展を続け、鎌高らしさを時代にアピールすることが出来るよう祈って、これを挨拶の言葉とさせていただきます。

鎌倉町立実科高等女学校時代

HISTORY 1928~1943 (昭和3年~昭和18年)

☆鎌倉町立実科高等女学校の設立☆

本校の前身である鎌倉町立実科高等女学校は1928(昭和3)年4月に開校しました。当時、神奈川県内では、家事・裁縫の実技習得を重視した実科高等女学校の設立が相次いでおり、鎌倉町が昭和天皇の即位記念事業として設立した本校は県内で15番目の実科高等女学校でした。校舎は鎌倉尋常高等小学校(現在の鎌倉市立第一小学校)に併設され、小学校の2教室を借り受け、生徒数67名(2年生47名、1年生20名)での開校でした。入学資格は「尋常小学校ヲ卒業シタルモノ又ハ年令12年以上ニシテ之ト同等以上ノ学力ヲ有スル者」と定められ、現在の中学校1年から高等学校1年までにあたる4年間が修業年限でした。

1931(昭和6)年3月14日に第1回卒業生36名が卒業しました。卒業生は卒業記念短歌を残しており、第1回から第11回卒業生の短歌短冊が現在も保存されています。

第1回卒業生短歌

かきりなき まなひのみちは とほくとも
あゆみそめなむ けふのこの日に (鈴木 政子)

☆御成小学校併設☆

1933(昭和8)年12月、鎌倉町立御成小学校が新設されたことにともなって、本校は御成小学校の北側校舎の一部を使用することになりました。御成小学校への併設は、1952(昭和27)年に現在の校地に移転するまで、19年間続きます。

1939(昭和14)年11月、市制の施行にともない本校は鎌倉市立実科高等女学校と改称されました。この頃、小学校から中等学校への入学準備教育が加熱しており、同年9月に文部次官通達で、入学者の選抜に学科試験を課すことが廃止されました。以後、入学者の選抜は「小学校長の報告・中等学校での人物考査・身体検査」によることになりました。



昭和3~5年頃、当時の制服は和服です。



平成11年4月、第1年1組、ピカピカの一年生。

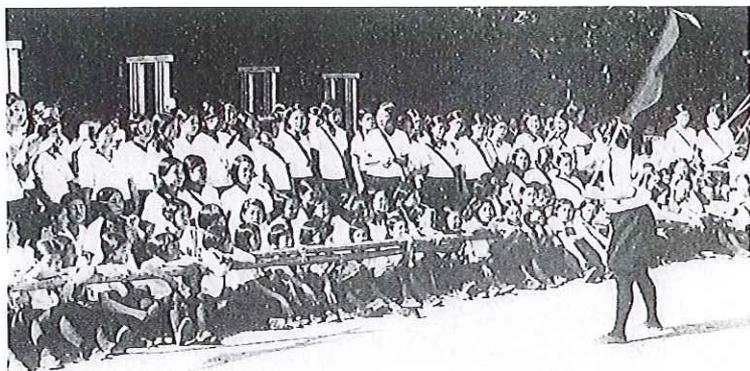


昭和9年、数学の成績発表



昭和14年頃、修学旅行の思い出写真。

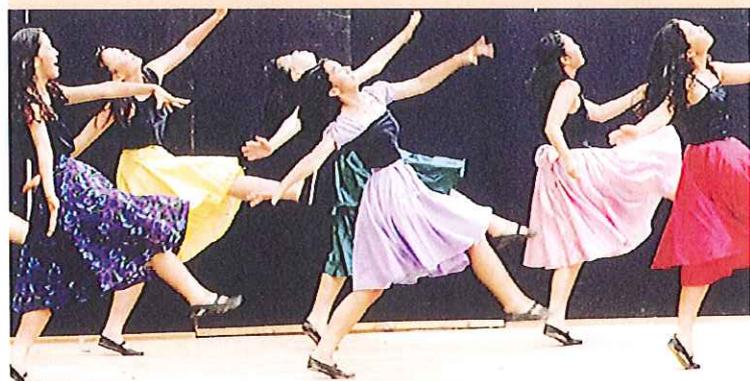
1928 (昭和3)年 初の普通選挙実施
 1929 (昭和4)年 世界恐慌始まる
 1931 (昭和6)年 柳条湖事件 (満州事変勃発)
 1932 (昭和7)年 五・一五事件
 1933 (昭和8)年 国際連盟脱退
 1936 (昭和11)年 二・二六事件
 1937 (昭和12)年 盧溝橋事件 (日中戦争始まる)
 1941 (昭和16)年 太平洋戦争始まる



昭和の初期、応援風景



昭和初期の茶道の授業



平成6年 ('98) 鎌倉寮における女生徒のパワー。



昭和初期、数学の授業

鎌倉実科高等女学校永代記録より (抜粋)

礼儀作法

- ・言葉使ハ丁寧ニシ粗野ナル方言又ハ軽薄ナル流行語ヲ用イザル様ニ注意セシム。

登校下校

- ・毎朝朝礼前ニ登校シ下校時迄校門外ニ出ヅルヲ禁ズ。
- ・放課後30分以内ニ下校スベシ。但特別ノ事アル時ハ教師ノ許可ヲ受クベシ。

往復時ノ注意

- ・左側通行ヲ守ル。
- ・無断ニテ寄り路廻り路ヲセヌコト。
- ・乗車通学者ハ車内ノ道徳ヲ守コト。

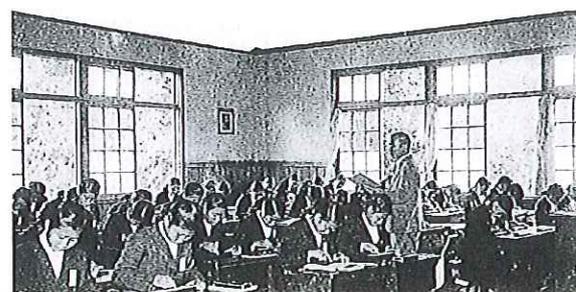
清潔法

- ・毎日校舎内外ノ清掃ヲナシ毎週水曜日ニハ大掃除ヲナシ教室内廊下ノ油敷ヲナシ下履上履ノ区別ヲ厳守ス。

昭和初期の学校規定は現代に生かしたい事項ばかりです。

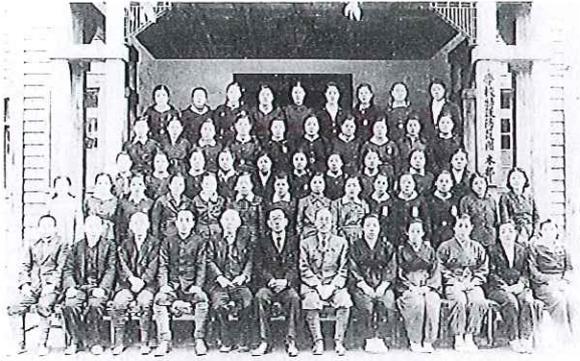


昭和初期、なぎなたの授業のようである。



昭和初期、そろばんの授業

- 1943(昭和18)年 学徒出陣
- 1945(昭和20)年 ボツダム宣言受諾／降伏文書調印
- 1946(昭和21)年 日本国憲法公布
- 1947(昭和22)年 教育基本法・学校教育法公布
- 1949(昭和24)年 湯川秀樹博士がノーベル物理学賞受賞
- 1950(昭和25)年 朝鮮戦争始まる



昭和20年3月、国民魂、ゲートル、モンペ姿の卒業記念写真

戦争末期の卒業式

昭和20年3月26日、戦争中の最後の卒業式が行われた。そのときの卒業式次第

1. 一同着席
2. 一同起立
3. 校旗入場
4. 一同敬礼
5. 宮城遥拝
6. 国歌奉唱
7. 勅語奉読
8. 勅語奉答歌
9. 祈念
10. 卒業証書授与
11. 学校長式辞
12. 知事告辞
13. 市長祝辞
14. 来賓祝辞
15. 卒業生総代答辞
16. 唱歌・卒業の歌
17. 校歌
18. 一同敬礼
19. 校旗退場
20. 一同退場

卒業式と前後して、合唱等が在校生・卒業生によって演じられていたのであるが、この送別学芸会は昭和18年3月で中止となり、「従来ノ送別会ニ代ルモノ」として「報国団退団式」が行われた。「報国団退団式次第」は次のようなものであった。

1. 一同敬礼
2. 君が代
3. 青少年学徒ニ賜リタル勅語奉読
4. 祈念
5. 団長訓示
6. 在校生総代送別ノ辞
7. 退団者答辞
8. 閏兵分列式
9. 校歌
10. 萬歳三唱
11. 一同敬礼

神奈川新聞〈昭和24年4月7日〉より

社説 鎌高問題

「赤い先生」の追放問題で、鎌倉市立高等学校は、紛争をつづけている。それがたつたものと見え、新入学應募者は、わずか十九名、しかも入学式当日の入学者が九名にすぎず、あるいは廃校となるかも知れぬとさえいわれている。

ところがPTAは、市長の追放提訴に賛成するものと反対するものとに分裂しているが、数の上では追放派が圧倒的だ。もちろん圧倒的だからといって、それが直ちに民主的だとは言いがたいし、理論的に合理性を持っているともいえない。それと同様に「赤い先生」

を擁護するということだけで、それが進歩的であるとも断じられない。

今日では市長に解雇権がないから、市長が「赤い先生」を追放したいと希望することは、権力の発動とはいえないが、一つの政党や一つの思想を不利ならしめる目的で、権力の発動が行われるということ、憲法第十五條の平等の原則に反する。この反面追放派の父兄が請願書中に訴えている「先生は、教育について中立を守るべきである」という東京軍政部の説がある。懸教育委員会が市長の提訴をどうさばるか。懸教委の悩みはここにあるであらう。

いま便宜上、これを「赤い先生」ではなく、一般の先生に例をとつてみたい。A先生は民自党、B先生は民主党、C先生は社会党とそれぞれの党派であったとする。これらの政党は、いずれも父兄や社会から問題視されてはいないが、自分の属している政党の党勢拡張を校内で行ったならば、その結果は一体どうなるであらうか。これが激化した場合、必然的に先生間に対立が生じ、分裂が生ずる。この空気が授業に反映しないと、これは、あり得ない。

先徒は、朝に保守政党の健全性、社会主義の危険性を教えられ、夕べには保守政党の反動性、社会党の進歩性を説かれるとき、はたしてその去就に迷わないであらうか。憲法の第十五條は、たしかに正しい。他人の自由を拘束し、阻害する思想でないかぎり、われわれは、自ら求めるところならば、保守的であるとは進歩的であると急進的であるとか、わらず、自由に思想し得るのである。けれどもこの思想の自由にも、おのずから限界があり、節度のあることは、いうまでもあるまい。特定の政党、思想結社に属さない学校や司法官、警察官などにあつては、思想の中立、政党の中立は、遵守されなければならぬ条件である。これは、その人が意識的に自己の思想的見解をもつて教育し、あるいは事件を審理する危険があるからではない。思想は、体臭のごとく、たとえ本人が意識しない場合にも、おのずとにじみ出るものであつて、それが関係する事柄に反映するものだからである。

社会は花園を踏み荒らすものには、黒であらうと赤であらうと組み合わないであらう。

背景：(1) 3月25日に鎌倉市議会は、同盟休校にかかわったとされる3教員を教壇から追放するよう、人事権をもつ県教育委員会に対して要請している。

(2) 4月11日に県教育委員会は小出校長の休職と1教員の追放を決定した。

注釈：「赤い先生」-同盟休校にかかわったとされる急進的な教員

HISTORY 1951~1964 (昭和26年~昭和39年)

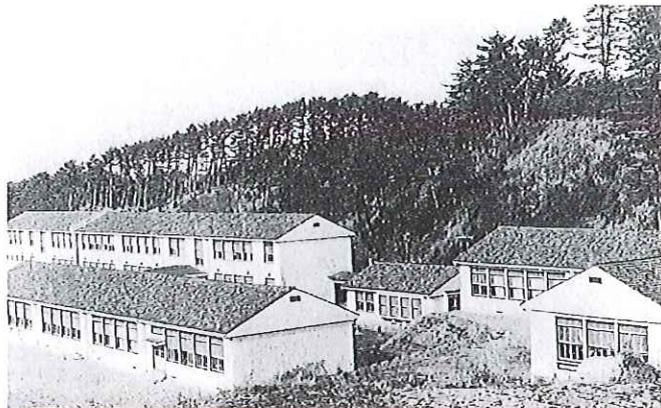
☆県への移管と日坂移転☆

鎌倉市の高等学校建設促進委員会は、本校の校舎を建設する用地を探すため、1949（昭和24）年12月に現地視察をおこないました。この時視察したのは十二所前山公園、大塔宮裏と七里ガ浜日坂の3か所で、この他に葛原ヶ岡も候補地となっていました。結局、鎌倉市は広い面積が確保でき、眺望にも恵まれた日坂を校地と決定し、1951（昭和26）年2月に1万8千坪余りの土地を買収して、校舎の建設を開始しました。一方で鎌倉市は県に対して、本校の県移管を陳情していましたが、1951年3月に県への移管が実現し、本校は神奈川県立鎌倉高等学校と改称されました。1952（昭和27）年2月に待望の新校舎が完成し、創立以来24年間、小学校に併設されていた本校は初めて独自の校舎をもつことができました。しかし、予算がないために御成小学校からの引っ越しは、職員と生徒が江ノ電や借り物のトラックで行いました。日坂は現在よりも急勾配で、荷物を選び上げるのは容易ではありませんでした。

☆鎌倉高校草創期☆

移転直後はグラウンドも未整備で体育館もなく、入学式・卒業式は屋外で行うという不自由な学校生活でした。PTAの強力な支援を受け、また生徒達も材木運びを手伝って、次のように環境整備がすすめられ、同時に生徒会活動の基礎も築かれました。

- 1953（昭和28）年 第1回文化祭開催
「にっさか」（生徒会新聞）創刊
- 1954（昭和29）年 プール完成、歩こう会始まる
在日アメリカ軍の協力でグラウンドが整備される
- 1956（昭和31）年 校歌完成発表会（県立音楽堂）
- 1957（昭和32）年 体育館兼講堂（旧体育館）完成
- 1958（昭和33）年 第1回合唱祭開催（講堂）
- 1960（昭和35）年 図書館完成
- 1961（昭和36）年 生徒会館完成



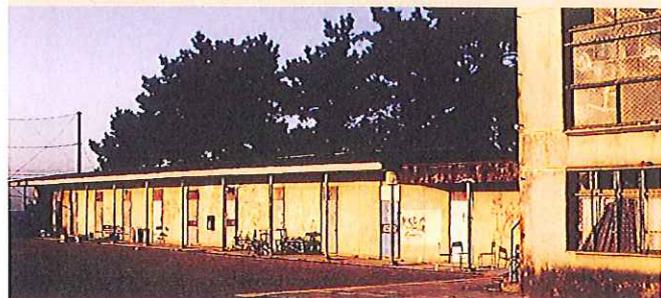
昭和28年（53） 新築された旧校舎



昭和33年（58） 旧校舎全景



昭和38年（63） 赤い屋根がモダンな旧校舎



昭和39年（64） に建てられた生徒会館
写真は平成10年に撮影。しっかり礎をとりました。

- 1951 (昭和26)年 サンフランシスコ講和条約調印
- 1953 (昭和28)年 テレビ放送の開始
- 1956 (昭和31)年 国際連合に加盟
- 1957 (昭和32)年 ソ連が人工衛星の打ち上げに成功
- 1964 (昭和39)年 東海道新幹線開通/東京オリンピック開催



平成10年(98) リフレッシュされ、威風堂々たる現在の校舎



昭和28年(54)に完成したプールで、現在も活躍中の水泳部員



鎌高校歌のあゆみ

1955 (昭和30年)には、現校歌ができ、翌年2月8日に、横浜市紅葉坂、県立音楽堂において、華々しく「校歌発表演奏会」が行われた。

さらに、1962 (昭和37年) 3月13日には、コロムビアレコードにおいて、校歌を録音し、45回転のEP盤が作製された。この盤のB面には、作詞者神保光太郎が自ら非常に気魄のこもった調子で、校歌の朗読をしているのが印象深い。また、城所校長の挨拶も入っており校歌が学校行事はもちろん、生徒の日常生活、家庭にも溶けこんで口ずさまれるように訴えている。



残っている部屋のカーテン

画家(1956年卒業)

田口 雅巳

緑濃い里山に赤い屋根、壁は薄めの黄色、窓には白いカーテン……今も目に浮かぶ私達の鎌高だ。教室からの眺めはいつも眠けを誘う長閑さ、周辺も今日のように家も店もなく、まだ134号線も未完成の静かな景色だった。一見、青春学園ドラマにぴったりの雰囲気にも思えたが、そんなドラマが、みんなの思い出の中にあるのだろうか？

陸上部にいた私は、ほとんど放課後はグラウンドにいたが、記録も伸びず、次第に美術部室に入り浸るようになっていた。二年生の時、ある公募団体展(東京都美術館)に入選、その通知を陸上部合宿中に受け取り「これを商売に……」と思いついた。

ところが、その展示会場へ行ったら大きい作品ばかりで、8号を2枚つなぎ合わせた私の絵は、なんとも貧弱だ。「やっぱり100号位じゃなきゃ……」と思ったが、大きいキャンバスは高価でとても買えない。だが、美術室には白いカーテンがゆれていた。

高校美術展に絵を運ぶ風呂敷にとかなんとか言って持ち出し、安い材木で作った枠にカーテンを張り、亜鉛華粉をニカワで塗って立派なキャンバスが二つ出来た。それに描いた一点が今も手許に残っている。その頃は「モラルを上回る創作意欲……」なんてイキがってたが、ちょっとは気がひけた。でも四十数年前の母校のカーテンの一片があるってのもうれしい気分だ。

さて、当時の校舎のカラー写真は見かけないと聞いた。もう時効とは思うが、七十周年を寿ぐのと罪ほろぼしも兼ねて、赤い屋根の校舎の絵を寄贈することを吉川同窓会長と約束した。校長室の真上の美術部室の窓には、ちゃんと新しい白いカーテンを描いて……。



HISTORY 1965~1979 (昭和40年~昭和54年)

☆文部省が戦後初の格技場を建設☆

1966（昭和41）年3月、格技場が文部省の予算を用いて建設されました。敗戦後の連合軍による占領政策の中で武道教育は排除されていたため、文部省の予算で格技場が建設されたのは戦後初めてのことでした。また、1964（昭和39）年から木造の旧校舎は順次、鉄筋コンクリート造りの現校舎に建て替えられ、1972（昭和47）年5月には校舎落成記念式典がおこなわれました。

☆高校紛争の時代☆

1960年代後半の大学紛争の影響は県内の高等学校にも及び、横浜・川崎市内ではバリケード封鎖がおこなわれた高校もありました。本校でも生徒議会を中心に卒業式の改革を求める運動が活発となり、卒業式がわずか15分で終了した年もありました。また、1970（昭和45）年頃の「にっさか」は毎号のようにセーター着用自由化運動の記事を掲載しています。

☆100校計画と大規模校化☆

中学校卒業者が急増し、高校進学率の引上げが求められたため、神奈川県は1973（昭和48）年に高校新設100校計画をスタートさせました。1973年に27学級（各学年9学級）であった本校も、1979（昭和54）年には36学級（各学年12学級）の大規模校となりました。この間、1975（昭和50）年12月には現E棟が完成し、また1976（昭和51）年4月には県立七里ヶ浜高校が本校併設で開校し、翌年3月までC棟6教室を使用していました。

☆創立50周年☆

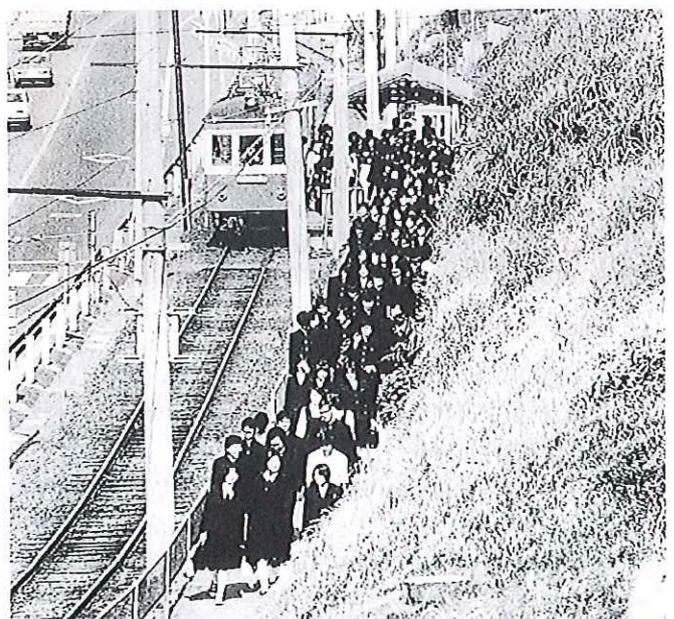
1978（昭和53）年10月、創立50周年式典が体育館（旧体育館）で挙行了されました。記念式典の中で松井博之生徒会長は「（鎌高には）50年の歳月が作り上げた伝統的校風があります。実践性・自主性・協調性という三本の柱があり、これらが生徒会活動・部活動行事に表れております。・・・私たちはこの伝統的校風を受継ぎ、守り、今後何世紀も発展させるよう努力してゆきたい」と述べています。



昭和53年（78）鎌倉新聞「にっさか」100号記念組版発行される。



昭和41年（66）に完成した格技場、現在、窓ガラスの多くはペアガラスに変わっている。



正門前「鎌倉高校前」またも山が崩れている

HISTORY 1980~1989 (昭和55年~平成元年)

☆新体育館の落成と運動部の活躍☆

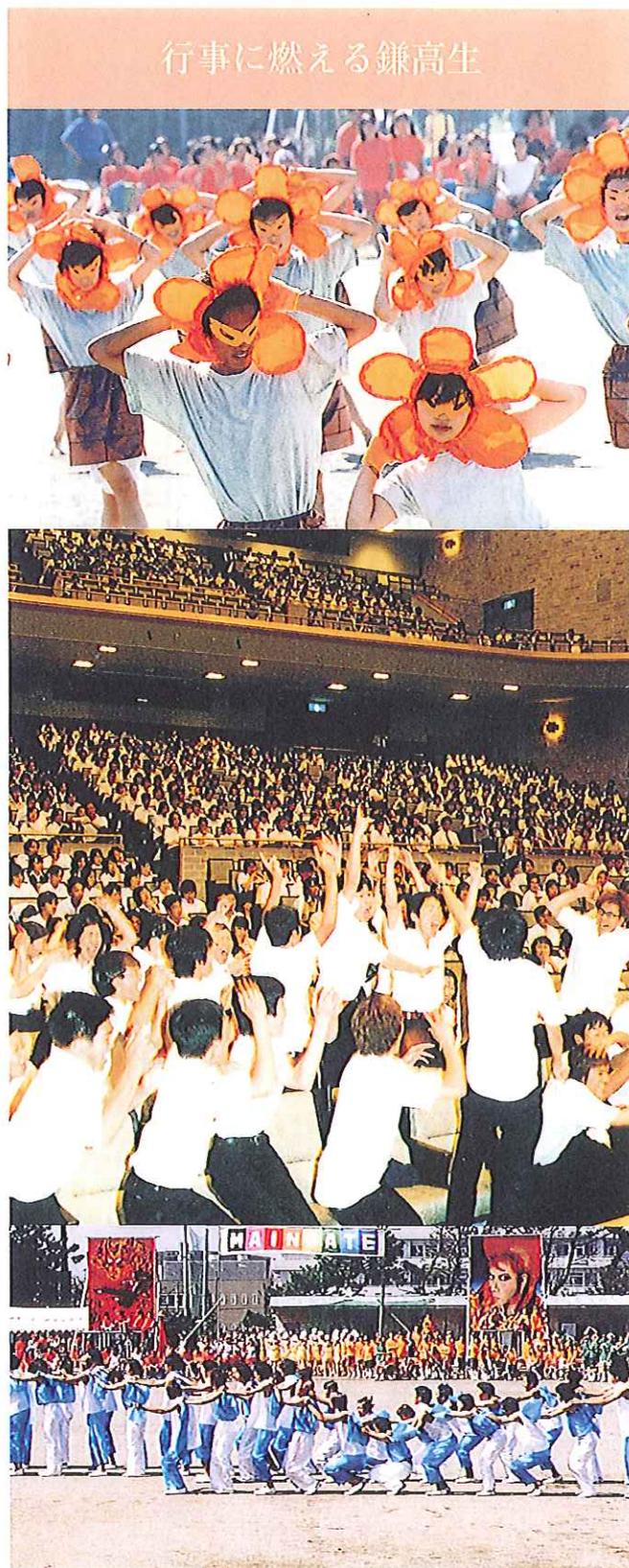
学級数の増加にあわせて、従来の体育館の約1.7倍の床面積をもつ新体育館が建設され、1980(昭和55)年2月に落成式典がおこなわれました。新体育館の完成によって体育の授業展開が改善されただけでなく、部活動の練習環境も大いに充実しました。従来からスキー山岳部・弓道部・硬式テニス部・陸上競技部・水泳部などが、しばしば県外大会に出場して活躍していましたが、新体育館の完成以後、バスケットボール部・バドミントン部・バレーボール部が次々と関東大会・全国大会への出場を果たしました。

また、1980年代はサッカー部・アメリカンフットボール部・吹奏楽部も県外大会で活躍し、本校の部活動の黄金時代であったともいえます。

☆1692名生徒数ピーク☆

本校の学級数は1979(昭和54)年以降、36学級(1学級45人)となっていました。中学校卒業者の増加により、1学級の入学定員が増やされ1986(昭和61)年度に46名、1987(昭和62)年度に47名となりました。この結果、本校の生徒数は1989(平成1)年にピークを迎え、1692名(47名×36学級)となりました。本校が県立高校となった1951(昭和26)年と、神奈川県の高校生の人数がピークを迎えた1989年のデータを比較すると次のようになります。

	1951年	1989年
高校生の人数(私立を含む)	70,870人	348,195人
高校進学率	55.0%	94.9%
県立高校数	39校	165校



行事に燃える鎌高生



80年代「鎌高ボケ」論

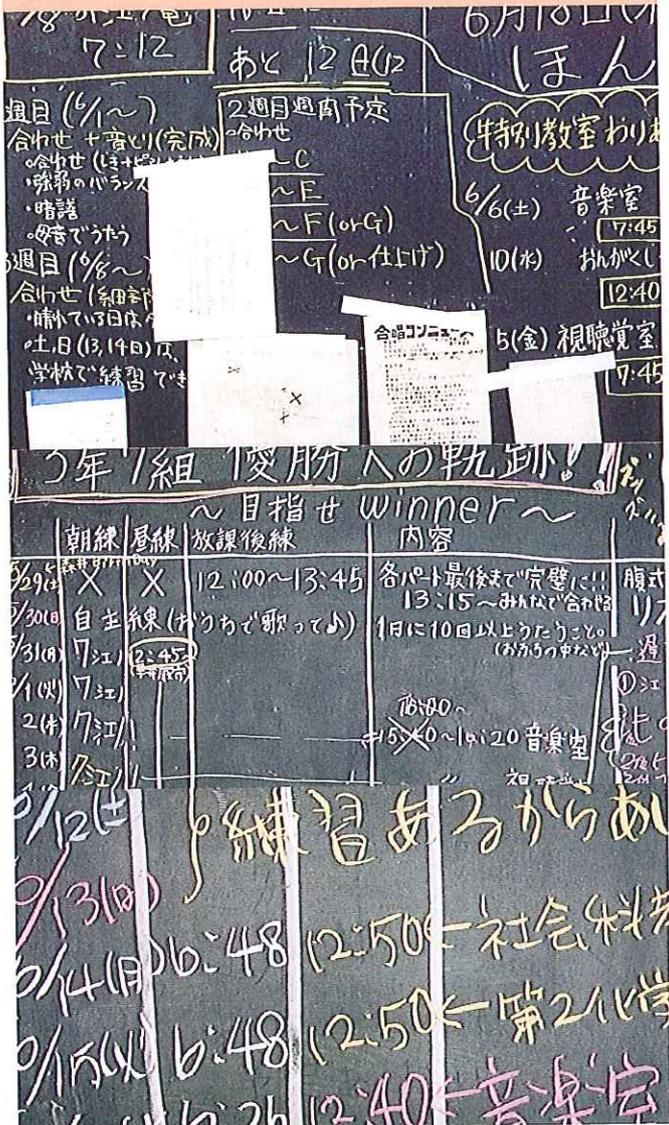
元本校職員
旭 光王

1983(昭和58)年 東京ディズニーランド開園

1988(昭和63)年 消費税導入(税率3%)

1989(昭和64・平成元)年 昭和天皇崩御/平成改元

合唱コンクールに燃える情熱が
黒板にたたき込まれている。



ひとしほ合唱コンクールの練習

鎌高は行事が盛んであるとよく言われる。鎌高祭(文化祭)、体育祭、合唱コンクールとクラス主体に学校全体が盛り上がる時期が年に何回かある。そこにいくつかの鎌高伝説が生まれてきた。「体育祭の年は浪人が多い」「合唱コンクールでは1年生が帰れコールの洗礼を受ける」そして「鎌高ボケの花が咲く」等々。近年はクラス数の減少等により行事の質が変化しているかもしれないが、1学年12クラスで計36クラスが競い合う光景は80年代がピークであったような気がする。70年代に生徒会を中心に基礎づくりをし、80年代に充実期を迎える学校行事の形態の核となったのがクラスである。そのクラス編成をどのようにするかということが鎌高のテーマの1つだった。学習指導要領の改定にともなうカリキュラムの改革を何度かはさみながら、毎年カリキュラム委員会で問題となったのは、クラスの均質性をどう保つかということであった。均質性とは「男女の人数比を等しくする」「選択科目別編成はしない」ということで、各学年のどのクラスも男女がバランスよくおり、進路希望もいろんなヤツがいるということである。

これはカリキュラムを編成していくのに大きな条件になる。1年次の芸術選択の問題、3年次の理系文系の振り分け方の問題などである。美術クラスをつくれれば合唱コンクールに不利になるかもしれないとか、理系クラスをつくれれば男子クラスができるかもしれないかを心配したのである。どのクラスも等しく行事に参加しやすいように、クラス編成をどうするかをカリ検で議論したのである。教科活動と教科外活動が密接につながっているところに鎌高の特色があった。どのクラスも等しく「行事に燃える」ことができるべく教員も工夫したのである。それは教員が「ボケの花が咲く」よう土地を整備していたことかもしれないが、生徒達の活動をみるのが教員の楽しみでもあった。本当にボケて枯れはててしまっただけでは困ることではあるが。さて今年「浪人の多くなる」年であったか私もさっぱりわからなくなってきた。